

それぞれの部活が語る想い



350号

錦城高等学校新聞委員会
編集室 2021

みんなでつくる
錦城高校新聞

**部活停止期間の今、
部員はそれぞれ
どのような想いをもって
いるのか取材しました**

再び部活動停止に

1月7日(木)に発令された緊急事態宣言を受け、錦城高校では部活動が原則禁止に。今号では前号に引き続き、複数の部活動に現在の思いを取材した。

再開を願う声も…

バドミントン部は1月に予定されていた冬季大会が中止となった。

「先輩方の悔しい気持ちを引き継ぎましたが、自分たちもこのままで終わるのではないかと不安です」と部長の谷野桃花さん(2C)。部員の横

(編集部共同取材)

道種里さん(2H)は「部活ができる時間は限られているので、再開してほしいです」と語る。停止期間中は感染対策をした上で部員とランニング、縄跳びをしているそうだ。

11の期間に勉強も

「日頃のストレスを発散する場所がなくなってしまう、本当にきついです」と話すのはサッカー部部長の関直哉さん(2H)。部活停止前は、新人戦から気持ちを入れ替えて練習していたという。部活停止期間は「トレーニングはもちろん、引退後のことも考えて、勉強に本気で打ち込みたいと思います」と語る。関さんは「自分自身サッカー

交代制で部室の様子を見る際に、飼育しているグリーンイグアナと触れ合う部員



1部は大好きですし、部員同士本当に仲が良いので早くみんなでサッカーをしたいです」と話した。

イレギュラーな活動形態

生物部部長の須田義輝さん(2A)は「部室にいる生き物たちと思ひ切り触れ合えないことが悲しいです」と話す。現在、哺乳類や小型の爬虫類の世話や部員で分担して各自宅で行っているそうだ。また、魚類や大型の爬虫類は部室の確認をする際に餌をあげているという。

須田さんは「生き物たちがこの状況下でも元氣な心配です。部活が再開したら迅速に生き物たちにストレスがかからないような体制を作り、今まで通り活動したいです」と心境を語った。

将棋部 全国大会中止に

11月8日(日)に行われた全国高文連将棋新人予選大会で好成績を残した将棋部の小沼紗弥さん(1A)と平澤響さん(1L)。2人は1月28日



全国大会出場予定だった2人

むらさき草

「大事なことはこれからの行き先(この地下鉄をもし乗り過ごしたら)どこまで行ってしまおうのだろう(もう戻ることにはできないのに)…。これは櫻坂46の『最終の地下鉄に乗って』という曲の一節である。「人生において一度過ぎてしまったものは戻らないのに、これからの時間をぼーっと過ごしていても良いのだろうか」と感じた▼昨年3月から約3か月続いた「全国一斉休校」。要請された

当時は中学3年生だった。翌日、学年集会が開かれ、そこで学年の先生が言った「当たり前の日常は当たり前ではない」という言葉が今でも心に残っている▼中学3年生になったときから1日1日を大切に生きてきたつもりだった。しかし突然、もう学校へ行けるのか分からない状態になってしまうと「授業をもっと受けたかったな」とか「給食を味わって食べればよかった」など後悔ばかりが押し寄せてきた▼そして先月、再び緊急事態宣言が発令され、部活動停止を余儀なくされた。編集委員のみんなと対面で活動ができなくなってしまった。しかし、以前のように「あれをやっておけばよかった」という後悔はない。自分から積極的に先輩にコツを尋ねたり、一つひとつの記事を丁寧に書き上げたりすることができたからだ▼時間は常に進み、変化し続けている。そんな世の中で「また明日は来るからいいや」と投げやりにならないうことが、中学3年生の時の自分は当たり前になっていたのだと思う▼編集部を去るまであと1年と少し。長いようであつという間に過ぎていくだろう。「当たり前の日常は当たり前ではない」。この言葉を胸に刻んで、新聞を作成できる1日1日を大切に過ごしていきたい。(紅)

(木)〜30日(土)に兵庫県で行われる予定だった全国将棋新人大会への出場が決定していたが、緊急事態宣言により1月上旬に中止が決まった。

2人は部員からアドバイスをもらった。詰将棋をしたりして準備を進めていたという。「中止と聞いた時はとても悲しかったです」と振り返る小沼さん。平澤さんは「全国大会の舞台で色々なことを吸収

* * *

部活動の停止期間は緊急事態宣言が解除されるまでが目安とされている。今後も錦城高校新聞では「錦城生の今」を伝えることを目標に新聞を配信していく。